

設立総会記念講演要旨

「中国新出土の木簡と帛書」

マイケル・ローウェ

一九六一年、森鹿三・藤枝晃両先生たちとこの地を訪れたときのことだと思ひ出される。その時、私はこの地の発掘の結果、木簡が出土しようとは思ってもみなかった。いま私は奈良国立文化財研究所に心からの祝詞をのべたい。

さて、一〇世紀に中国で印刷術が発明されると、手によって書かれたものは価値のないものとみなされるようになった。しかし近年の手書きの材料の発見は、そのような見方に根本的な疑問をもたらした。一九七二年以前に、われわれが知ることのできた木簡は中国の西北辺境から出土した一万点にすぎず、その大部分は行政文書であった。しかもそれは断片的な文書の破片にすぎなかった。もちろん例外的に完全な文書や儀礼の書写した物もあったし、絹に書写した書物や、唐代には紙の文書の断片もあった。しかしそれが一九七二年以前に知られていた文書のすべてであった。

一九七二年以降、居延の漢代の行政文書木簡二万点が発見され、そのうち完全な文書木簡は四〇点程である。このほか中国各地で発見された木簡・竹簡類は約七〇〇〇点に及んでいる。それに絹に書かれた書物や唐代の紙にかかれた長い文書の断片も発見されている。従来発見されていた木簡類のすべては掃溜に捨てられたもので

あったが、最近発見されたものには、副葬品として埋葬されたものなど、完全な形で埋められたものがある。それは本文校勘という点からも、またすでに散逸してしまっている文献が含まれているという点からも、文学者・歴史学者にとってきわめて重要である。科学者はそれから古代中国の医学その他の科学を明らかにすることができ、地理学者にとっては古代の地図が重要である。ここではこれらの新発見の重要な出土遺物のうち、中国古典・行政文書・科学上の材料・副葬品目録・地図の五つの部門にわけて述べたい。

まず中国古典で注目すべきは馬王堆の墓から発見された絹に書かれた易経である。その内容は現行本と大差はないが、註がなく、八䷎の順序が異なり、今文系のテキストであることが重要である。後漢・洛陽にあった石に刻んだ易経と比較すると、その三百年間の変化の様子を知ることができる。ついで注目されるのは老子の道德経である。これも、馬王堆の墓から出土した絹に書いた写本であるが、紀元前一六八年に書写されたものである。道德経は二巻からなりたっており、現行本では上巻が道教、下巻が徳経となっているが、この道德経は逆になっている。さらにこの道德経の附録には儒教の言葉が記されており、伊尹・五行・経法・十大経などの名辞がみられる。一方、論語については七一〇年に卜天寿という子供が手習いに紙に書いた断片がある。これには章ごとに孔子本鄭氏注がついており、本文校勘の上からも重要である。さらに二〇〇以上の竹簡をつないだ二片の兵法も重要である。一つはすでに散逸していた孫臏兵

法であり、もう一つは孫武兵法である。いずれも紀元前三世紀のテキストである。さらに馬王堆から出土した。現在知られるものとも長い写本である戦国策、二七章があり、うち一六章はいままで知られていない章である。このような典籍のほか、紀元前三〇六年〜二七一年の年代記と、紀元前二二一年の秦王朝の成立を含む歴史書もあげておきたい。

第二に、一〇年ほど前、中国の西北辺境から非常に異常な状態で出土した行政文書木簡の断片がある。これには、法律文書・徵税文書・契約文書があるが、湖北省から出土した木簡は、三グループあり、商鞅の法律があり、農業生産に関する部分、度量衡に関する条例もあり、この五〇〇点の木簡は唐代以前のなまの律令ということになる。その他、律令の草案、戸数割と財産税の一覧表をはじめとした徵税・納税文書、売買の主要な契約書があるが、これらはいずれも、従来知ることの出来なかった新しい事実である。新出土木簡研究の利点は、考古学者によって組織的に発掘されたため、一本一本の木簡の出土状態が克明に記録され、完全につながる木簡が四〇点も復元されたことである。その結果、以前の断片を形式によって復原したことが誤っていなかったことが証明された。

第三に科学上の新発見について。馬王堆から出土した竹簡には医学関係のテキスト「黄帝」があり、これは問答形式で薬の投与方法が記されている。そのほか病気の処方箋、七〇〇種余の病気の徴候・原因を記した絹にかかれたものなども、旱灘坡などから発見され

ている。医書のなかには馬・牛など六畜の病気についての記述もある。科学に関しては、医学のほかに天文学の書物が重要である。やはり、馬王堆から発見された帛書には、五星の宿について、紀元前二四六年〜一七七七年の間の星の観察結果が記されているが、その記述内容はきわめて正確である。例えば土星のうごきは三〇度と書かれているが、現在の天文学者によれば二九・四度であるという類である。六世紀の墓から出土した星座表によれば、高松塚のそれによく似ている。また天文学に関連して暦がある。中央政府のかなり高い役所でつくられた紀元前一三四年の暦が発見されているが、これには「七年」とのみ記されて元号は記されていないことも注目される。

第四の副葬品目録は、死者への供物のリストであるが、豊富なものから貧弱なものまで雑多であるが、目録と現物とを照合することができる点できわめて重要である。さらに第五に古い地図の例としては、馬王堆から出土した三種の古地図がある。これも現在のところ中国最古の地図であるが、第一は紀元前一六八年の楚長沙王国の二十万分の一の地形図であり、第二は軍人の配置図で一〇万分の一縮尺で、三色で書かれている。第三は都市地図であるがまだ発表されていない。これらは単なる地図のみの問題ではなく、軍人図では人口や戸数など住民の状況が記されている。

いままで比較的重要と思われる遺物についてみてきたが、まだ部分的にしか発表されていない。私は全体の写真が発表されるのをまって、さらに分析を加えてみたい。

(文責・佐藤宗諱)